2020（令和2）年度

障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究

― 障害者スポーツ選手キャリア、コロナ禍の影響、ユニ★スポ体験の効果、に着目して ―

第1章

障害者スポーツ選手のキャリア調査

第2章

コロナ禍におけるアスリートの活動状況調査

第3章

ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査

公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

2020（令和2）年度　障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究
公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

はじめに

YMFS 調査研究
障害者スポーツ・プロジェクト・リーダー
藤田紀昭

歴史的な一年だった。開催予定であった東京オリンピック・パラリンピックが延期され、人々は不要不急の移動や会合の自粛が求められ、感染の不安と将来への不安にさいなまれた一年であった。この報告書が出される 2021 年 3 月にどのような状況になっているのか誰も予想できない。ビッグイベント開催の意味や意義、スポーツの価値、スポーツ推進の目的、オリンピック・パラリンピックのレガシーとは何かなど、様々な問いかけがスポーツ界になされてきた一年でもあった。

しかし、こうした状況下だからこそ「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であり、全ての国民がその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会が確保」（スポーツ基本法前文）することを考えたい。なぜなら、体を動かす機会が減り、人とのつながりが持ちづらくなっている今だからこそ、健やかで明るく豊かな生活を享受するためにスポーツの果たす役割が期待されると考えられるからである。特に、障害のある人のスポーツ実施率はない人に比べ低い。また、感染すれば重篤化しやすいと言われている。安全を担保しつつも、障害者のスポーツ推進の歩みを止めてはならない。

本研究プロジェクトも障害者スポーツの推進に貢献することを大きな目的としており、同様に歩みを止めることなく進んでいきたい。本来ならば、パラリンピック開催に伴う各種メディアの報道の状況や、選手の社会的認知度、パラスポーツを支援する企業の状況などに関する調査を実施するはずであったが、これらについてはパラリンピック開催後に行うものとして今年度は実施しなかった。今年度はパラスポーツ選手のキャリア調査、2020 年のパラスポーツ選手の活動の実態調査、および、相互理解促進と共生社会実現への寄与と位置づけられる「チャレンジ！ユニ★スポ」に参加した児童生徒の意識の変化についての調査を実施した。

本報告書の第 1 章はパラスポーツ選手のキャリア調査の報告をしている。これは障害のある選手がどのようにしてスポーツを始めるに至ったかを明らかにするものである。調査

結果を蓄積し、その特徴を明らかにし、障害のある人がスポーツにアクセスしやすい環境づくりに役立てようとするものである。昨年度の 9 名に続き、今年度は 13 名の選手のインタビューを実施した。今年度はリモートによるインタビューとなった。その結果、中途障害の選手の場合、病院やリハビリテーションセンター等の医療関係者や社会福祉協議会等の福祉関係者から、障害者スポーツに関する情報提供を受けるケースが多いことがわかった。また、先天的障害者の場合は学齢期の体育やスポーツ経験がその後のスポーツ活動の開始に大きな影響を及ぼしていることが明らかになってきた。この調査に関しては次年度以降も様々な障害種の選手に調査をお願いして、結果を精度化し、障害のある人へのスポーツ普及に結び付けていきたい。

第 2 章は 2020 年度のパラスポーツ選手の活動の実態調査の結果を報告している。緊急事態宣言が発出されていた期間の過ごし方について、日常生活、目標設定、メンタルコントロール、トレーニング方法、感染防止のための対応方法、行動の仕方などを調査した。慎重すぎるほど慎重に行動しつつも、パラリンピックに向けて懸命に努力している選手の姿を見出すことができた。なお、この調査は選手のキャリア調査のためのインタビューの中で聞き取ったものである。

第 3 章は「チャレンジ！ユニ★スポ」に参加した児童生徒の意識の変化および、このイベント実施にあたって工夫した感染対策について報告している。この調査には 1000 人を超える児童生徒の皆さんに協力していただいた。「チャレンジ！ユニ★スポ」は着実に児童生徒の心に届き、ポジティブな意識の変化があったことが明らかになった。また、イベント実施の際行われた感染予防対策が紹介されている。今後、地域での各種イベントを実施する際の参考になると思われる。

障害者スポーツの推進を止めないために私たちプロジェクトメンバーも慣れないリモート会議やインタビューなどを行い、今回の報告となった。実際に会って打ち合わせができなかったこともあり、調査の細かな内容等に不十分な点があると考えられる。

	2012(H24)	2013(H25)	2014(H26)	2015(H27)	2016(H28)	2017(H29)	2018(H30)	2019(R1)	2020(R2)
大学における障害者SPの現状	○		○		○	○	○	○	
パラリンピアンのスポーツキャリア		○							
障害者スポーツ選手のスポーツキャリア								○	○
コロナ禍におけるアスリート活動状況									○
パラリンピック指導者の現状		○							
障害者スポーツ競技団体活動		○					○		
障害者SP選手発掘育成システム			○						
パラリンピアンの社会的認知度			○		○		○		
ジャパラ選手のスポーツキャリア				○					
パラリンピックTV放送					○				
地域現場の実態						○	○	○	
障害者SP関連CF状況						○			
チャレンジ！ユニ★スポケーススタディ								○	○

ご指摘、ご批判があればぜひ、お知らせいただきたい。

最後に、大変な社会状況の中、ご協力いただいた選手、児童生徒の皆さん、教員他の皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

■目次

はじめに 1

第 1 章
障害者スポーツ選手のキャリア調査 5

第 2 章
コロナ禍におけるアスリートの活動状況調査 61

第 3 章
ユニ・スポ体験での児童の意識変容調査 71

付録　ユニ・スポ調査票 98

■障害者スポーツ･プロジェクト

リーダー	藤田紀昭	日本福祉大学スポーツ科学部	教授
メンバー	小淵和也	（公財）笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所	政策ディレクター
	河西正博	同志社大学スポーツ健康科学部	助教
	齊藤まゆみ	筑波大学体育系	准教授
	中森邦男	（公財）日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会	参事
監修	浅見俊雄	東京大学・日本体育大学	名誉教授
		（公財）ヤマハ発動機スポーツ振興財団	理事
事務局	大庭義隆	（公財）ヤマハ発動機スポーツ振興財団	